様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８３３０１８９
研究課題名（和文）　起業家精神に富んだ勤労観・職業観を職業体験を通して中学生に育むための教材開発
研究課題名（英文）　Study of Career Education by Work Experience in Junior High School

研究代表者
高乗　秀明（TAKANORI HIDEAKI）
京都教育大学・大学院連合教職実践研究科・教授
研究者番号：４０３３５３１０

研究成果の概要：本研究は中学生に起業家精神に富んだ勤労観・職業観を職場体験を通じて育成する学習プログラムを開発し，その学習効果を検証すると共に教材の普及を図ることを目的としたものである。初年度の調査研究と基礎資料の収集を基に２年次には Web 教材「しごとチャレンジャー」を制作し京都教育大学ホームページ上で公開した。３年次にはこの教材を用いた授業を行い勤労観・職業観の形成と教材の有効性を検討，さらに教材の普及活動を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	3,200,000	960,000	4,160,000
２００７年度	9,300,000	2,790,000	12,090,000
２００８年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
年度			
総　計	14,800,000	4,440,000	19,240,000

研究分野：教育学
科研費の分科・細目：教科教育学
キーワード：キャリア教育，職場体験学習，アントレプレナーシップ，Web 教材

１．研究開始当初の背景

(1)「フリーター」「ニート」と呼ばれる若者の就労を巡る問題が社会の関心を集めているが，これは雇用問題に留まらず教育の課題でもあり，これまでの「進路指導」に替わって「キャリア教育」の必要性が認識され始めた。政府は 2003 年からの「若者・自立挑戦プラン」の一つとして中学生の５日間の職場体験学習（キャリア・スタート・ウイーク）の実施を推進している。従来の１・２日に比べて５日間の体験は教育効果が大きいとされる一方，準備や運営に掛かる教員の負担も大きく，事前事後学習の内容が必要最小限度のものとなってしまい，体験を通じての勤労観・職業観を育成するとうねらいの達成に関して課題が少なからずあるとの声が聞かれる。

(2) 21 世紀は知識基盤社会といわれ，職業で必要とされる能力にも大きな変化が生まれている。従来の職種に関わる専門的知識や技能と共にその基盤となるすべての職業人に求められる汎用能力（ジェネリックスキル）の重要性が注目されている。さらに，変化の激しい社会においては，リスクを引き受けながら新しいことに挑戦するアントレプレナーシップ（起業家精神）は新規事業を興す起業家だけでなく，すべての職種，職業で求められる能力となっている。しかし，これまでの進路・職業指導では個々の職種に求められる職能を基盤とした職業理解と，自身の職業適性の診断や振り返りによる適性理解とそれらのマッチングがその中心となっており，ジェネリックスキルやアントレプレナーシップへの理解は弱い。

⑶勤労観・職業観とは，一人ひとりが自身の働き方，生活の仕方を考えることである。社会が大きく変化し，就労環境や雇用条件が多様になる中では，どのような職業につくかということ以上に，どのような働き方をするのか，「ワークライフバランス」ということが重要になっている。また，職業には社会的責任が伴うが，それは一人ひとりの労働者のレベルから企業のレベルまで多様である。これらのテーマについて，中学校は義務教育の最終段階であるにも拘わらずその大半が高校へ進学するという中で，十分な指導が行われていない現状にある。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の３点である。

⑴フリーター，ニート問題を契機に若者の「勤労観・職業観」の形成に関わる課題が提起されているが，中学生段階における「勤労観・職業観」形成のあり方に関する問題点を，職場体験活動に焦点をあてて明らかにすること。その上で，中学生段階において形成が望まれる「勤労観・職業観」について，アントレプレナーシップの必要性を明らかにしつつ，その内実を解明することにある。

⑵上記⑴で明らかになったことを基礎とし，起業家精神に富んだ勤労観・職業観を職業体験を通して中学生に育むための学習プログラムを開発することである。研究開始当初の背景で述べたように，５日間の職場体験学習は広がりを見せてはいるが，その事前事後学習は，事前の諸注意と事後の感想発表で終わることが少なくからずあり，勤労観・職業観の育成に繋がっているとは言い難い現状がある。そこで，学校で使い易い可塑性の高い
教育プログラムを開発・制作し，出来るだけ利用しやすい方法で提供することにある。

⑶開発教材の活用によって，職場体験活動を通してどのような「勤労観・職業観」が育成されているのかを，研究協力校での授業実践を通して明らかにすると共に，この開発教材の有効性と検証し，更なる改善を検討すること。また，教材の活用，普及のための活動を行い，中学校での職場体験学習の充実に資することである。

３．研究の方法

本研究は３か年で行われた。各年次の研究方法の概要は以下の通りである。

⑴１年次（平成１８年度）

学習プログラム開発のための基礎的調査研究を行う。

・文献による基礎調査
・研究協力校での実態調査研究
・先進実践校の事例調査研究
・「勤労観」「職業観」に関する検討
・ Web 教材の導入に関する学習環境調査

⑵２年次（平成１９年度）

１ 年次の研究成果を基に学習プログラム（Web 教材）の開発・制作を行う。

・学習プログラムの基本構想の検討
・学習プログラム制作のための資料収集
・学習プログラムの制作
・制作された Web 教材「しごとチャレンジャー」の京都教育大学ホームページでの公開

⑶３年次（平成２０年度）

Web 教材「しごとチャレンジャー」の検証実践と普及活動を行う。

・教材活用のための「教師用指導の手引き」の発行
・研究協力校で教材「しごとチャレンジー」を用いた授業実践
・教材の有効性検証のための資料収集と分析，検討
・研究協力校での勤労観・職業観の調査
・Web 教材「しごとチャレンジー」の普及活動

４．研究成果

⑴ 「勤労観・職業観」と「アントレプレナーシップ」の明確化

教材開発に先立つ調査研究の中心となったのは中学生段階で形成をめざす「勤労観・職業観」の構成要素・内容を明らかにすること，その際，アントレプレナーシップをどのように位置づけるかということ。また，通常「勤労観・職業観」と一括りにされるが「勤労観」と「職業観」の違いとその関係を明らかにすることである。

研究の結果，「職業観」の構成要素として次の３点が明らかになった。

①職業に向かい合うこと，職業に関心を抱き，身近に感じること，さらに，折りにふれ，将来の職業像を思い描くこと

②職業人として，どのような働く方があるのかということに興味，関心を持つと共に，どのような働き方をしたいのかということを考えようとすること

③職業の社会的役割や職業に就いて働く目的について自分なりに考え，自分の意見を持つこと。

「勤労観」の構成要素としては，次の３点が明らかになった。

①互いが直接に関わりを持つことがない大きさの集団や組織において，役割を分担し協力しながら仕事を行い各人が責任を持って役割を果たすことの大切さを理解すること。

②役割（仕事）の遂行や目標の達成を通して，自己の能力を伸ばすことができることに気づき，また，それらを通じて人の役に立てること，人から喜ばれ感謝される自分について自信を持つこと。

③日常生活において目標に向かって最後まで努力を続けることや，役割に対し誠実に責任を果たそうとすることは，こらからの生き方を充実したものにする上で大切なことであると考えること。

アントレプレナーシップとの関わりでは，生徒がこの教育が育成をめざす資質，能力に関心をいだき，その意義を理解し価値を評価するということであると位置づけた。その価値は次の３つである。
①あたらしいことに挑戦すること
②自分のアイデアや創意工夫をすると
③独立して自分で会社や事業を運営すること
さらに，「勤労観」と「職業観」の関係では，小学校段階では育成の中心は勤労観で職業観と呼べるものは一部であるが，高校段階では勤労観は職業観の内側で機能し，外部には職業観という形で現れることになる。中学校段階は小学校段階で形成された勤労観がその後の経験をもとに変化，成長をしながらも，その外側に職業観が形成されはじめる時期といえる。したがって，この時期は職業観の内容そのものではなく，どのような勤労観を基盤にして職業観が形成され始めているかのかが重要であると考えた。
(2)職場体験学習の現状と課題の分析結果
職場体験学習に関する調査では５日間の職場体験学習が一定の成果を挙げつつも，次の３点が課題であることを明らかにした。
①実施日数の拡大に見合う学習成果の検証。
②事前事後指導の内容・方法の有効性と評価。
③職場体験学習での事業所との連携。
本研究においては②に焦点をあて，内容に関しては，職種にとらわれない職業・職能理解と生き方と関連づけた職業観，社会との関連に焦点を当てた企業理解が，方法に関しては実習での各自の課題設定と体験の内面化のための学習活動が課題であることを明らかにした。
(3)Web 教材「しごとチャレンジャー」の制作
本研究の中心は職場体験学習を核にその事前事後学習となる教材の開発，制作である。教材を「事前学習編」「体験学習編」「発展学習編」「しごと図鑑」「しごと図書館」で構成したが，基本コンセプトとして「これからの時代に求められる勤労観・職業観の育成を図ること」「職場体験を基に事前事後学習での主体的な学びの力の育成を図ること」の２点とし，以下の５つの特色を持つ教材として制作した。
①「勤労観・職業観」を構成する要素の一つとして，職業で必要とされる能力についての理解がある。この教材では，どのような職業に就いても必要とされる基礎的，汎用的能力（ジェネリックスキル）の観点とアントレプレナーシップの観点の２つから，この能力を捉えることとし，「コミュニケーション能力」「行動力」「問題解決能力」などとともに「チャレンジ精神」や「創造性」など，これからの時代に求められると能力を基盤とした「勤労観・職業観」の育成をはかれる教材とした。
②事前事後学習の内容としては，働くことの意義や働き方を考えること，実習先の職種の理解，マナー学習，職場体験を振り返り，自分の目標や将来の夢を考えるという通例のテーマと共に，企業のしくみの理解や社会的役割を考えること，働く人の権利や保護，これからの企業や社会のあり方と働き方とのかかわりをテーマとして取り上げること。そしてこの教材の基本テーマを「働くこと」と「人生をよりよく生きること」のかかわりを考える教材とした。
③事前事後の学習の方法については，価値観の形成を図るというねらいから考え一方的な教授による受け身的な学習活動ではなく，調べ学習や話し合い活動，振り返りやまとめ，発表など生徒の能動的，主体的な学習活動が重視される方法を取り入れたことであること。また，学習は個人が基本であるが活動形態は小集団を基本とし，互いの学びあいにより学習が深まる指導法を基本にした教材であること。
④自主的な学習をサポートするために，参考図書の紹介や Web 教材の特性を生かしたリンク集を充実させること。また，勤労観・職業観について具体的に考える題材として職業人へのインタビュー記事を資料とする教材であること。そこでは，仕事にかける思いや情熱とともに努力や苦労にも触れ，さらにアントレプレナーシップもうかがえるものとすること。なお，対象者は２０歳代を中心に多彩な職業を男女のバランスを考慮しながら人選すること。
⑤教材はインターネットを通じて提供される Web 教材とことすること。このことで学校の実情に応じた指導計画に基づき，必要な単元だけを取り出して授業で使うことが可能となる。また，コンピュータとインターネット環境が整っていれば，いつでもどこでも生徒が個別学習や自主学習をすることができる教材であること。アクセスについては無料とし，経費の負担無しで自由に学校が教材を利用できる環境とする。
教材は京都教育大学ホームページ内の「教育支援ネットワーク」内「授業のたね」の「特別活動」「総合的学習の時間」の項で公開されている。
同時にこの教材を活用するために「教師用指導の手引き」を制作した。構成・内容は，
・教材の特色　・教材のねらい　・教材の構成
・教材の使い方　・学習の進め方と指導方法
・指導計画と学習展開例　・教材内容と活用方法　・教材使用に関するお願い，である。
特に学校の実情に応じた指導計画を作成する手がかりとするため「教材内容と活用方法」で教材の内容とその意図を詳細した。
(4)授業実践研究と教材評価
本開発教材を使用した授業実践を旧市街地に位置する京都市立中学校２校で行った。Ａ校は市内中心部に位置する中規模校で，校区は住宅と小規模の事業所がいりまじった地域である。Ｂ校は市内中心部やや南に位置する中規模校で，校区は住宅と小規模の事業所がいりまじった地域である。校区東部には中央卸売市場があり、保護者にはここの関係者も多い。
この教材を使用した事前事後学習はＡ校では

全18時間中16時間，Ｂ校では全15時間中６時間であったが，Ａ校ではこの教材に基本にした学習であったがＢ校では自校のプログラムを基本に部分的な教材使用となった

この学習の開始前と終了時に「勤労観・職業観」に関する調査（質問紙法）を行った。その結果，次のことが明らかになった。

①職業観の形成に関しては全般の回答結果から職業への関心や意欲の高まりが伺えた。特に「自分がしたい仕事や職業が思い浮かんでいる」「こんなふうに働きたいという姿や希望がある」という項目でそのことが顕著であった。一方「働くことを身近に感じる」という項目については，Ａ校では肯定的回答が増えたがＢ校ではやや減少した。ところが「早く大人になって働いて自分のお金で生活したい」という項目はＢ校では変化が見られないがＡ校では減少傾向が見られる。職業理解についても両校には違いがあった。

これらの結果から，職場体験における職業観の形成においては，それまでの家庭生活や日常生活での職業との出会い，勤労経験の違いが影響を与えている可能性が推測された。

職業選択での基準に関しては「給料」「長期雇用」など労働条件が上位に挙げられているが，職場体験を経て「職場の雰囲気が良いこと」を重視する回答が増えたことが特徴的であった。それに対して，優先順位が下がった項目としては「会社の将来性」「自分の趣味などと両立」という項目であった。また，重視する生徒とそうでない生徒に分かれる傾向が見られたのが「資格や技術が身につくこと」という項目であった。さらに，全体としての優先順位は高くはないが，体験学習後，重要とする生徒が増えた項目としては「働く会社が環境問題などの社会問題に進んで取組んでいる」という項目であった。

これらの結果からそれまで漠然と抱いていた仕事や職場のイメージが少しずつ具体化していることが伺える。また，この教材の特色の１つである企業理解についても学習の成果が伺えた。

働く目的や意義に関しては，大きな変化は見られなかったが，働くことを個人の自立と捉える見方と家族を養うという見方がその中心にあり，社会全体の視点から考えると点は弱いという結果であった。

②勤労観の育成並びに職業観との関連づけに関しては「礼儀やマナー」「お金を計画的に使う」「友達を大切にする」「自分でできることは自分でする」「何事も最後まであきらめずに頑張る」が仕事をする上で必要な力であるという認識で健全な勤労観が育っているという結果であった。事後の変化では，マナーに関する重要度の認識が低下し「他人の注意を素直に聞き，行動を改める」「学校行事や部活動に積極的に参加する」「地域の行事やボランティア活動に参加する」が高まった。勤労観と職業観の関連づけが進んだと判断できる。

③アントレプレナーシップの育成に関しては，「新しいことに挑戦する」の評価が仕事上で必要な能力というレベルで上昇したが「自分のアイデアや創意工夫を活かす」「「独立して自分の店を持つ」は，仕事の遂行，職業選択の基準，生き方モデルのいずれのレベルでも評価の変化，上昇は見られなかった。しかし，「新しいことに挑戦する」は職業選択のレベルでは肯定・否定の評価が２分する傾向が見られた。

④教材評価では，勤労観・職業観の育成に関わる諸要素が含まれていること，ワークシートや参考資料等が準備されている点で有効だと評価された。使いやすさと役立ち度という点では，半数以上の生徒が肯定的な回答であったが学級間の差異も見られ，教員の教材の理解度と指導のあり方が影響しているものと思われる。アントレプレナーシップの育成という点では「新しい価値の創造プロセスの体験」の必要性という観点から課題が指摘された。

(5)教材の普及活動

京都市を中心に全国で広報活動を行った。Ａ校では研究期間終了後も教材使用の予定がある。東京都三鷹市では全小中学校教員に，冊子の生徒用テキストと教師用指導手引きが配布された。

５．主な発表論文等

〔図書〕（計１件）

高乗秀明，杉本厚夫，水山光春
「教育の３Ｃ時代」世界思想社　2008年
vi－x　77p-153p　（全242頁）

〔その他〕

高乗秀明，中西仁，原田紀久子
「初年度研究報告書」全92p　A4判　2007年

高乗秀明，中西仁，原田紀久子
「研究成果報告書」全91p　A4判　2009年

高乗秀明
Web教材「しごとチャレンジャー」
京都教育大学ホームページ上（下記アドレス）
http://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/takanori/index.html　2008年

高乗秀明
「Web 教材しごとチャレンジャー・教師用指導の手引き」　全60p　A4判　2008年

６．研究組織

(1)研究代表者
高乗　秀明（TAKANORI　HIDEAKI）
京都教育大学・大学院連合教職実践研究科・教授
研究者番号：40335310

(2)研究分担者
中西　仁（NAKANISI　HITOSHI）
立命館大学・産業社会学部・准教授
研究者番号：30411010

(3)研究協力者
原田　紀久子（HARADA　KIKUKO）
特定非営利活動法人アントレプレナーシップ開発センター　常務理事・事務局長